

図書紹介

知識の社会史：
知と情報はいかにして商品化したか

ピーター・バーク●著
井山弘幸；城戸 淳●訳

(株) 新曜社
(03-3264-4973)
東京
2004年
A5判
408p.
定価3,570円（税込）

何といったらよいのか。けったいな本である。物尽くし、あるいはカタログ、といったらよいか。何のカタログかといえば、本の、印刷物の、図書館の、著者の、読者の、知識分類法の、・・・の、カタログである。以下、内容を紹介しよう。

まず、この本の対象は16~18世紀ヨーロッパの情報と知識。ここにいう情報とは「生の素材」、知識とは「調理された素材」を指す（「生の」とか「調理の」などというと、なんだ文化人類学か、などと顔をしかめる読者がいるかもしれないが、その臭みはわずかなので、ご安心のほど）。

この本のねらいだが、それは知識を組み立てる体系がさまざまである、ということにある。これを物尽くしのノリでこなしたのが、著者の独創であり、この本の読ませどころである。『情報管理』の読者であれば、何らかの形——例えばシソーラスや書誌分類など——で知識の体系化に関心を持っているはずだ。その意味でこの本はお勧め。話がそれたが、ここまでが1章。

カタログは「知識を生業とする」人から始まる（2章）。読書人、青鞆、医師、弁護士、聖職者、学生、スコラ学者、人文学者、出版者、多筆家、書記官、書記、博識家、・・・が、次々にあいさつをする。

次は「知識を確立する」機関のカタログ（3章）。大学、インドの館あるいは貿易の館。アカデミー、

植物園、階段教室、天文台、古物蒐集協会、サロン、珈琲店、修道院など。

続いて「知識を位置づける」ための仕掛けが列举される（4章）。図書館、布教、交易、言語、都市——住居表示から職業紹介まで——など各種の情報ネットワーク。

ここで「知識を分類する」方法が整理される（5章）。大学のカリキュラム、図書館の書誌目録、そして百科事典の配列。これが時代とともに動く。カリキュラムでは天文学に地理学が割り込み、医学に化学が便乗する。書誌目録には「その他」が現れる。百科事典には「アルファベット順」が使われる。

次の話題は「知識を管理する」体制（6章）について。ここで国家と教会が登場する。官僚制は「知識に基づく支配力の行使」である。ということで、異端審問、諜（ちょう）報、探検調査、地図製作、国勢調査、検閲などの歴史がたどられる。

テーマは「知識を売る」仕組みに移る（7章）。剽窃（ひょうせつ）、知的財産権、産業スパイ、証券取引、印刷業、ニュース、新聞など。その中心は、ベネチア→アムステルダム→ロンドンと移る。ここで新商品として出現したのが参考図書。

このあと「知識を獲得する」読者が登場する（8章）。16世紀のモンテニーの蔵書は271冊であったが、18世紀のモンテスキューは3,000冊も持っていた。この変化に対応して、注や目録が工夫される。ノートをとる習慣も現われる。精読法もブラウジングも出現する。

最後に「知識を信じることと疑うこと」で、著者はこの本を締める（9章）。ここは読んでのお楽しみということにして、割愛。

老書生の評者は、この本の巻末の注や文献表を見て、あれ、こんなにも知らない著者が残っていた、これにアクセスできる余生はとてもないな、と後悔している。そんな後悔をしないためにも、現役の読者諸氏は、今のうちにこの本をご覧になつたら、いかがでしょうか。

（名和小太郎）